

KJ 法入門： 質的データ分析法として KJ 法を行う前に

田中 博晃
広島国際大学

概要

KJ 法は 1960 年代に誕生した古典的な研究方法であるが、近年は英語教育学研究の中で質的研究法としての KJ 法が再び注目を浴びている。そこで本論では KJ 法でデータ分析を行う際の留意点、特に避けなければならない「4 つの NOT」を提示する。この点を誤用すると、KJ 法とは似て非なるものになってしまうので、KJ 法を行う上では注意が必要である。また KJ 法は発想法として誕生した経緯もあり、質的研究の方法として使用された場合の評価基準が提示されていない。そこで本論では構造構成主義という新たな科学論で KJ 法の基礎付けを行った上で、KJ 法の評価基準の提示も行う。

キーワード： KJ 法，質的研究法，構造構成主義

1. はじめに

KJ 法とは文化人類学の分野で川喜田二郎が考案した研究方法（川喜田，1967, 1986, 1997）で、心理学や看護学など多様な領域に応用されているだけでなく、英語教育の分野でも質的データ分析方法として利用されている。データ分析の際は名刺程度の大きさのカードに転記したデータをグループ分けし、グループごとの関係を図解化した上で、それを文章化し解釈を行う。

質的データの情報量が膨大で混沌としている場合でも、KJ 法を用いれば、図解化によって情報コンパクト化でき、結果をまとめやすくなる。つまり質的データの情報を図解という形で簡潔且つビジュアルな形に圧縮できる。またデータのグループ分け、図解、叙述化のプロセスで、研究者は主観を積極的に活用することで新たな発想や仮説を生み出すことができる。量的研究は仮説検証に向いている一方、質的研究は仮説の生成や仮説の深化に向いており、KJ 法は特に仮説の生成に威力を発揮する。あるいは観察に基づくフィールドノーツの言語データを KJ 法で分析すれば、特定の教育現象や学習者を詳細に記述できる。量的研究では平均値をベースに記述統計などの形で現象の記述を行うが、平均値はあくまで集団データの平均であって個々の学習者の特性は平均値の中に埋もれてしまう。一方 KJ 法を用いれば特定の学習者の特性に焦点を当て一回起生の現象を詳細に記述できる。このような利点から KJ 法は新たなアイデアや仮説生成だけでなく、学習者や教育現象の記述や量的研究の補足など多岐にわたる目的で使用されている。KJ 法自体は 60 年代後半に開発された古典的な方法であるが、現在でも多くの質的研究に用いられ、その輝きを失っていない。

KJ法と類似した質的研究方法としてグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach, 以下GTAと略記。Glaser & Strauss, 1967)もあるが、偶然にもKJ法と同じ1967年に書籍の形で出版されている¹。GTAとKJ法は言語データを細分化し、グループ分けをして、図解化を行うという点は共通している。一方、KJ法は研究プロセスに難解な専門用語を使用しないため初学者にも理解しやすい。またGTAは量的研究のアンチテーゼとして生まれたのに対して、KJ法は量的研究と質的研究の融合を目指した研究方法という違いもある(舟島, 2007)。

そこで本論では質的研究法としてKJ法を実践するに当たっての留意点をまとめておく。特にKJ法を実践するために避けなければならない「4つのNOT」を提示しておく²。

2. KJ法を実践するための4つのNOT

2.1 先行研究を当てはめない

KJ法を貫く根本精神は「データをして語らしめる」である。実際にKJ法を用いて質的データを分析する際にこの根本原則を忘れてしまうと、KJ法に似て非なるものになってしまうので注意が必要である。この「データをして語らしめる」をできるだけ正確に理解するために、川喜田(1986)の論を追ってみる。

人間がなんらかの信念や願いを抱くのは、まことに人間らしいことであって、なんら咎めるべきことではない。それどころか、それがなくては这个世界に人間らしく生きてゆくこともできない。

しかし正しい判断に達するには、これらの信念や願望によって決して判断を曇らせてはならない。判断は、あくまでデータをして語らしめるのでなくてはならない。これがKJ法を貫くひとつの根本精神である(p. 15)。

このように、川喜田(1986)はKJ法の根本精神としてデータに忠実に判断を行う重要性を強調し、研究者の信念や願望によってデータに対する判断が歪められないように注意を喚起している。では、これが実際にKJ法でデータ分析を行う際にはどのように関連してくるのか。

つまり、「多分、こうであろう」とか「この考えや理論を当てはめれば、このように解釈でき、まとまる」といった具合に、ありあわせの理論や既成概念でデータをまとめることは禁物である。また、「こういう結果がでてほしい」という希望的観測で無理にまとめることも禁物である。それらとはあべこべに、おのれを空しくして、データの語りかけに最も自然に従ってまとめるのでなければならない。(p. 78)

研究者は先行研究の知識があるため、ついデータを先行研究の概念や理論に当てはめてしまう。特にデータをグループ分けし、表札をつける際には、先行研究に沿ってデータを分類し、先行研究で提示された概念名を付けてしまいがちである。しかしKJ法では一切の先入観や希望的観測を捨てなければならない。これが「おのれを空しくして」という言

葉の意味である。おのれを空しくした上でデータに向き合い、データから読み取れる事柄でグループ分けし、表札をつけ、図解化し、叙述化しなければならない。

ではなぜ KJ 法では先行研究に基づいた分類を行ってはいけないのか。なぜおのれを空しくしてデータをして語らしめなければならないのか。川喜田 (1986) は「多くの学者が、できあいの仮説や理論ばかりをあてはめて、せっかくのデータをつまらなくまとめあげようとする」(p. 10) と痛烈に批判し以下のよう述べている。

仮説や理論ばかりに頼りすぎると、それ以外のことに目をふさいでしまう危険がある。いくらデータが語りかけてきても、聞く耳を持たなくなるのである。(p. 11)

KJ 法はそもそも発想法としてスタートしており、データから新たな仮説やアイデアを生み出すことを目的としている。そのため既存の理論や概念に引きずられてしまうと、創造的な発想が疎外されてしまうからである。

以上のようにおのれを空しくしデータをして語らしめることこそが KJ 法を行ううえで最も大切な概念である。質的データを分析する際は、先行研究の理論や概念に基づいてデータをグループ分けしたり、表札をつけたり、図解を行ったり、叙述化することは慎まなければならない。すべてのよりどころはデータであり、データに根ざした解釈を行わなければならない。

2.2 KJ 法はカテゴリー分けの方法ではない

KJ 法をカテゴリー分けの方法として使う場合がある。例えば質問紙調査のための質問項目を準備する段階で KJ 法が用いられることがある。学習者に自由記述形式の質問紙調査を行い、そのデータを KJ 法によってグループ分けし、質問項目を作成する方法である。この方法は英語教育学や教育心理学の研究においても見られる。

しかし、KJ 法とは質的データをグループに分類することを通じて新たな発想を生み出すことを目指した研究方法であり、グループ分けすることが目的ではない。つまりデータをグループ分けする作業は手段であって、グループ分けを通じて何かを生み出すことが目的である。よって上記のような方法は厳密に言えば KJ 法ではなく、「KJ 法におけるグループ分けの手法を使った」と記述するのが適切である。その際も既存の理論的枠組みに当てはめたグループ分けを行ってしまうと、KJ 法の理念に反するので注意が必要である。

2.3 KJ 法は 1 種類ではない

KJ 法に複数のバージョンがあることは一般的に知られていない。実は KJ 法は最も初期の川喜田 (1967) 以降、2 度の改訂が行われており大きく 3 つのバージョンがある。それは川喜田 (1967) の 1967 年版、川喜田 (1986) の 1986 年版、川喜田 (1997) の 1997 年版である。

各バージョンで KJ 法の細かな手順や用語の使い方が異なっているため、研究論文において自分がどのバージョンの KJ 法を行ったかを明記しておかないと混乱が生じる可能性がある。特に 1967 年から 1986 版においては多くの点がバージョンアップされているので要

注意である。また 1997 年版は大きな改訂はないものの、書籍自体が一般に販売されていないため入手困難である。そこで各バージョンの相違点をまとめておこう（表 1 参照）。

表 1. KJ 法の各バージョンにおける相違点

1967 年版	1986 年版	1997 年版
1) 紙切れ作り	1) ラベルづくり ・名称が変更	1) ラベルづくり ・1986 版を継承
2) グループ編成 ・「一行見出し」の作成 ・見出しは土の香りを入れる	2) グループ編成 ・「一行見出し」から「表札」に変更 ・表札は各ラベルの「志」を集めて作成する ・手順の明確化 ラベル拵げ→ラベル集め→表札づくり	2) グループ編成 ・1986 版を継承 ・表札づくりの具体的方法として、「核融合法」と「まぜあわせ方式」を提示
3) A 型図解化 ・手順は空間配置→輪どり（リング）→輪どりの間を記号で結ぶ ・図解化のみで分析を終了することも可能。この場合は KJ 法 A 型と呼ぶ	3) A 型図解化 ・手順は空間配置→図解化 ・図解化の手順は、元ラベルの添付→島どり→島間の関連付け→シンボルマーク→表題と註記の記入。 ・図解化のみで終了しない。	3) 図解化 ・1986 版を継承
4) B 型文章化 ・文章化は必ずしも必要ではない。ここまで分析を続けた場合は KJ 法 AB 型と呼ぶ	4) B 型叙述化 ・図解と叙述化はセット	4) 叙述化 ・1986 版を継承

まず KJ 法の第 1 段階である「紙切れ作り」は 1986 年版以降で「ラベルづくり」に名称変更されている。1997 年版では 1986 年版がそのまま継承されている。ここは名称の変更だけなので、論文や研究発表をする段階で注意が必要なだけで、分析段階では支障が無い。

第 2 段階のグループ編成では、バージョンごとにアップデートが見られる。まずラベルごとの見出しが「一行見出し」から 1986 年版と 1997 年版では「表札」に名称変更されている。また見出し（表札）の作り方の原則がやや変更されている。1967 年版では見出しは元データの発言の肌触りができるだけ伝わるようにし、抽象化した表現は避けることが提示されている。これを 1967 年版では「土の香りをなるべく伝える」という（川喜田, 1967, p. 71）。一方 1986 年版以降では各ラベルの「志」を聞き、それを基に表札を作るとなっている。志とは川喜田二郎独特の言葉遣いで、1 枚のラベルが全体として能動的に訴えかけ

ているものを指す。KJ法での志を理解するためには、川喜田（1986）が提示している志の言葉の成り立ちを参照すると直感的に分かりやすい。川喜田は「志」を「ここと」と「指す」の合成語として考えている。ここでいう「こころ」とは「この短歌のこころは・・・。」という歌の解説に使われている「こころ」と同じである。つまり和歌の意味を集約的に捉えればどうということか、それを「こころ」と呼んでいる。さらに「指す」という言葉が入ることで、そのこころを誰かに対して能動的にアピールするというニュアンスが生まれる。これがKJ法でいう「志」である。1986年版と1997年版では、表札づくりの際には、それぞれのラベルが訴えかける志を読み取り、各ラベルを集約した志を表札として作成することをルール化している。

つまり1967年版では元データのニュアンスが良く現れるような一行見出し（表札）を作るが、1986年版以降では元データをさらに深く読み込み、それが訴えかけるものを汲み上げることで表札（一行見出し）を作成するのである。端的に言えば、ラベル作りの過程により深い解釈が求められるようになったと言えよう。さらに1997年版では1986年版を踏襲しながらも、表札づくりの具体的な方法として「核融合法」や「まぜあわせ方式」が提示された。これによってグループ編成の手順が詳細かつ具体的に提示された。これによって、表札づくりにどのような方法を用いたかを「本論ではKJ法の中の核融合法（川喜田，1997）によってグループ編成を行った」と論文中に簡潔に提示できるようになった。

第3段階の図解化は1967年版と1986年版ではA型図解と呼ばれていたが、1997年版では単に図解と呼ばれるようになった。また図解化の中で用いられる用語と手順が1967年版と1986年版・1997年版で大きく変更されているので要注意だ。1967年版では紙切れを解釈可能な形に配置し、それを縁取りし、それらの関係を記号で結ぶという手順であった（空間配置→輪どり→記号の挿入）。

一方、1986年版と1997年版での手順は空間配置のあとに図解化というシンプルな2段階構造になり、図解化の中で行うプロセスが明示された。まず元ラベルを清書用紙に貼り付け（「元ラベルの添付」）、それを縁取りする。この作業は「輪どり」という呼び名から「島どり」に変更されている。そして島間を記号で結びつけるのだが、1967年版ではこの作業に特定の名称はなかったが1986年版と1997年版では「関係記号」で「島間の関連付け」を行うと明記された。また1967年版では記号に特定のルールはなく研究者の創意工夫で作成するようになっていたが、1986年版と1997年版では統一の関係記号が提示された。これによって各研究者の行う図解の理解に統一のルールが設けられた。ここでは1997年版で提示された記号例を提示しておく（図1参照）。

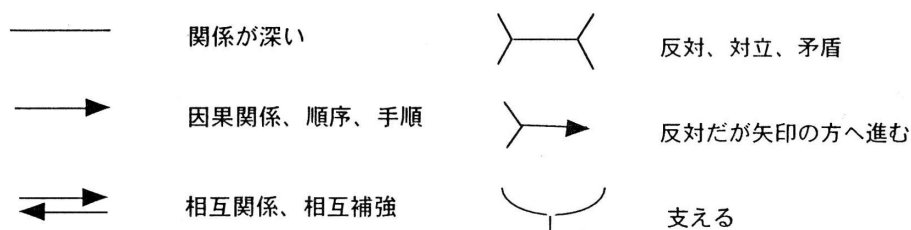


図1. 関係記号の例（川喜田，1997）

1967年版ではここで図解化は終了だが、1986年版と1997年版では図解に追加事項がある。まずシンボルマークの導入である。シンボルマークとは「島の訴える内容を、視覚的に、そして感性や直感的理解に訴えるようなシンボル化されたもの」(川喜田, 1986, p.137)である。シンボルマークの利点として川喜田(1986)は(1)図解の内容が他者に伝わりやすくなる、(2)自分の図解に対する理解度も深まる、(3)プレゼンテーション時に遠くからでも見やすくなる、3点を提示している。シンボルマークは島の内容を視覚的に表すイラストでも、記号でも構わない。シンボルマークの書き方に明確なルールはないので、研究者が創意工夫すればよいことになっている。

また最後の作業として図解の表題を書き込み、最後に註記を付しておく。註記では(1)図解を作成したとき、(2)ところ、(3)データの出所、(4)作成者の4点を図解の右下に記入する。特に(4)に関しては、KJ法の作業を複数の研究者で行うことが多いため、論文本文を参照せずとも図解を見ただけで何名でKJ法を行ったかが明示できるようになった。

最後に1967年版ではA型図解化のみで分析を終了することも可としていた。この場合は特にKJ法A型と呼んでいた。しかし研究論文を作成するには図解化だけではなく、文章化も必然的に必要である。また文章化を行うことで、図解化の妥当性を確認し修正することもできる。そのため1986年版ではA型図解化と文章化がセットとなり、1997年版でもその形が継承されている。

以上がKJ法の3つのバージョンの相違点である。KJ法は1967年版から1986年版で大きく修正され、1997年版では1986年版を継承しつつも分析方法が詳細に提示されたと言えよう。最後に1986年版以降のKJ法の手順を大まかに示した図を提示しておく(図2参照)。

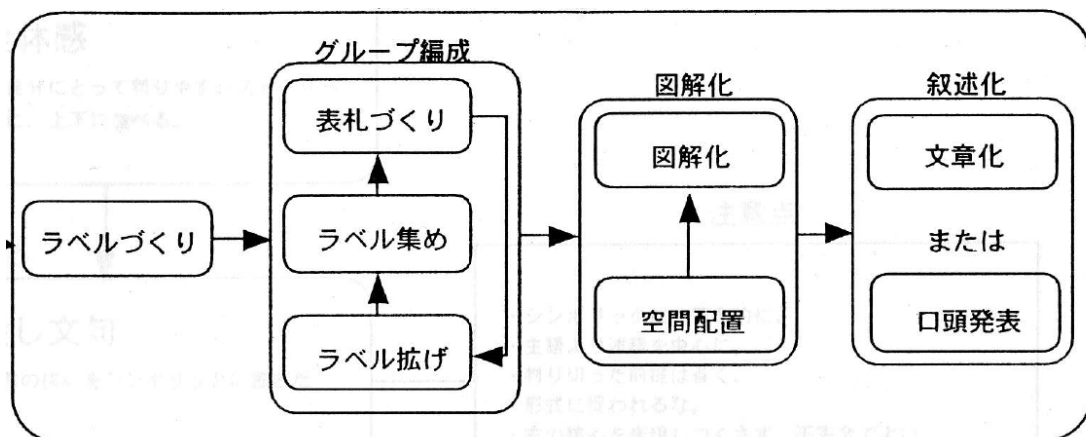


図2. 1986年版以降のKJ法の手順(川喜田, 1997を一部改定)

2.4 評定者間一致係数はKJ法らしくない

では最後にKJ法の評価について述べておく。KJ法では作業を複数の研究者で行うことがある。これを「グループKJ法」(川喜田, 1986, p.195)とよぶ。グループでKJ法を行った場合にKJ法の結果の妥当性の指標として評定者間一致係数を求めることがある。こ

れは各研究者が個別にグループ分けなどの KJ 法の分析作業を行い、その一致度を、評点者間一致係数などを用いて数理的に算出することで結果が研究者間でどの程度一致しているのかを検討する作業である。結論から言うと、このような評価方法は KJ 法らしくない評価である。

なぜ KJ 法らしくないかを説明するために、ここでグループ KJ 法の手続きを川喜田 (1987) に沿って述べてみよう。グループ KJ 法は通常数名程度で行われる。全員が同じ机を囲むように席取り、中央に「土俵」と呼ばれる模造紙を置いておく。まず全員にほぼ同数の元ラベルをトランプのように配る。各人が元ラベルの内容をよく理解した段階で、ラベル集めを行う。ラベル集めでは、誰かが最初の「親」の役割をする。親は自分の元ラベルのどれか一枚を読み上げ、それを土俵に提示する。各人は土俵上のラベルの志を聴き、同士だと思われるラベルを自分の持っているラベルからどんどんと土俵上に提示していく。そして全員でワイワイガヤガヤと品定めをし、納得のいくグループ分けを行っていく。こうして 1 セットのラベルが完成したら、別の人物が親となり同じ作業を繰り返す。こうしてラベル集めが終了したら、次は全員で表札作りを行い一段目のグループ編成が終了する。これを何度か繰り返し、より高次のグループを作っていく。次の図解化ではまず誰かが空間配置をしてみて、その図解の結果をストーリーとして全員に説明する。次に別の誰かがそれを修正し、またストーリーとして全員に説明する。これを繰り返すことで、全員でワイワイガヤガヤと議論しながら図解の完成度を高めていき、最後に文章化を行う。

以上の大まかなグループ KJ 法の流れから、評定者間一致係数を算出することが KJ 法になじまない評価であることが分かるだろう³。グループ KJ 法で重要なのは複数の研究者が分析の過程で互いのアイデアや解釈をぶつけ合って、よりよい発想を導き出すことであって、一致することがすべてではない。お互いの解釈を虚心坦懐に述べ合う主観の世界において、客観性を重視する評定者間一致係数は別の認識論にある。そもそも上記のグループ KJ 法では、グループ全員で集まって解釈を行うので、事後的に評点者間一致係数を求めること自体が困難である。

3. KJ 法の評価

3.1 新たな科学論の必要性

では評点者間一致係ではなく、どのような評価方法を KJ 法で用いればいいのか。Hammersley (1992) によると質的研究の評価は、1) 量的研究と同じ基準と用語で評価、2) 質的研究独自の認識論に基づいて評価、3) 質的研究の評価は不可能の 3 つの立場があると述べている。通常、英語教育学に限らずとも研究結果には客観性が暗黙裡に求められている。上述の評定者間一致係数も客観性を高めるための評価指標であり、上記 1) の評価にあたる。しかし KJ 法は研究者の主観を使って分析を行うのだから、1) の評価では KJ 法は客観性の担保されていない研究として批判にさらされる。一方で 2) の評価方法にあるように質的研究独自の評価指標も存在している (例えば、Guba & Lincoln, 1989; Lincoln & Guba, 1985)。これらは客観主義とは異なる科学論に依拠しており、KJ 法にも適用可能である。そのため質的研究の依拠する科学論に精通している研究者にとっては説得力があるかもしれないが、一方で客観主義の立場の研究者から見れば科学的でないといみなされることに代わりは無い。つまり KJ 法を評価するには客観主義の観点による評価も質的研究独

自の評価のどちらも十分であるとは言いがたい。また3)の立場であれば、質的研究はなんでもアリの相対主義に陥ってしまう。結局のところ量的研究と質的研究が依拠する科学論が異なるために、共通で公平な評価が行えないのである。この難問を解決するには2つの科学論を内包するような新たな地平線に立った次世代の科学論に依拠して KJ 法を評価する必要がある。

そこで本節では構造構成主義（西條，2005）という新しい科学論を KJ 法の認識論として設定し、KJ 法のための評価基準を提示してみたい。まず川喜田二郎自身が KJ 法の評価のために「真の科学的な方法」（川喜田，1986，p. 476）を提示しているのので、それを概観した後、川喜田二郎の方法を構造構成主義によって基礎付けしながら修正することで評価指標を提示してみよう。

3.2 真の科学的な方法

川喜田（1986）は真の科学的な方法のためには、以下の3点が必要であると述べている。

- 1) データを獲得した手段・方法をガラス張りにした上でデータを提示すること
- 2) データの加工処理方法がガラス張りであること
- 3) 結論が明示されていること

第1にデータを獲得した手段・方法をガラス張りにした上でデータを提示する必要性を挙げている。質的データは質問紙調査による自由記述データ、観察に基づくフィールドノート、インタビューから得られる言語データなど多種多様に及ぶ。現象をどのような方法で切り取りデータ化したかによって、得られる結果は大きく異なる。そこで川喜田は第1点目として、データ収集方法を開示することを挙げている。

また質的データは調査協力者から直接得られるとは限らない。質問紙から得られる自由記述データはそのまま分析に用いることができるが、観察やインタビューデータは分析するには何らかの加工が必要である。観察であれば、観察したものをフィールドノートに記録し、それを分析可能な質的データの形に細分化する必要がある。同様にインタビューデータも調査協力者と面接者の発言を文字おこした上で、分析可能な単位まで細分化しなければならない。このような加工処理の仕方が結果に影響を及ぼす。そこで第2点目として、データの加工処理方法がガラス張りであることが挙げられる。

最後の第3点目としては、結論が明示されている必要がある。KJ法を用いた研究では、しばしば結論がどこにあるのかを分かりにくい記述になってしまうことがある。そのため、川喜田（1986）はあえて第3点目を真の科学的な方法の要件とした。

以上が川喜田（1986）の提示する評価方法である。しかしこの評価方法にはいくつかの問題点がある。まず川喜田が提示する評価方法は、あくまで KJ 法を発想法として使用することを前提としている。発想法とは混沌としたデータ群の中から新たなアイデアを生み出す方法であり、発想法と質的研究法は同義ではない。質的研究法とは新たなアイデアや仮説を生み出すことも研究目的に入るが、それ以外でも現象や学習者を詳細に記述したり、あるいは量的研究の結果を補う目的でも使用される。つまり川喜田の言う発想法は質的研究のごく一部なのである。KJ法は川喜田（1967）のタイトルが『発想法—創造性開発のた

めに』とあることから分かるように、そもそも発想法として開発されたものであり、質的研究の方法として生み出されたわけではない。一方で近年の KJ 法の使われ方は、新たなアイデアを生み出す発想法よりも適用範囲が広がり、質的研究法として使用されている。このような現状をかんがみると、川喜田（1986）が提示する発想法の評価方法をさらに補強して、質的研究法の評価に発展される必要性があろう。

また川喜田（1986）では提示する真の科学的な方法の裏づけとなる科学論が十分に体系だって述べられていない点も挙げられる。川喜田（1986）では随所に川喜田の科学観が論じられているものの、それが科学論という原理的な形で提示されていない。この2点の問題点を構造構成主義を科学論として基礎付けることで解決に導いてみよう。

3.3 現象の構造化

構造構成主義とは構造主義科学論（池田，1998）をベースに西條（2005）によって定式化された科学論である。構造構成主義では現象に第一義を置き、現象の構造化を目指すことで一回起生の現象が扱うことの多い質的研究でも広義の科学性を担保できる科学論である。構造構成主義の扱う原理は深く射程は広範に及ぶため、その詳細は他にゆだねる（西條，2005a）。ここでは西條（2005a）の論を追いながら構造構成主義の科学論について概説した上で、西條（2008）が概説する KJ 法と構造構成主義の関係を参考にしながら、より詳細に2者の関係について述べる⁵。その後、著者が作成した評価基準について説明していく。

まず構造構成主義は量的研究や質的研究、あるいは英語教育学などの自然科学研究だけでなく物理や科学といったハードサイエンスにも共通して適用できる科学論である。例えば量的研究は客観性を重視し主観を研究から排除しようとしてきたが、一方で質的研究は主観こそが研究に大切であり、過度な客観性の偏重に警鐘を鳴らしてきた。このような量的研究と質的研究の議論に代表されるように、2つの領域が今まで対立してきた原因は各領域が依拠する科学論が異なっていたからである。このような信念対立を解除するには、2つの異なる科学論を包括するようなよりメタレベルの科学論が必要になる。そこで2つの領域に共通する科学論として構造構成主義が生まれた。構造構成主義は科学性の最低要件を2点提示している⁴。

1つ目が現象の構造化である。ハードサイエンスにしる、ソフトサイエンスにしる、構造構成主義では研究の行為を「対象となる現象を説明する構造を探求する営み」と考える。ここでいう「構造」とはコトバとコトバの関係式を指す。例えば化学では水は H_2O で $H_2 + O$ というコトバとコトバの関係式で表す。同様に英語教育学でも「コミュニケーション能力は○○能力と□□能力から成り立っている」や「学習者の3欲求を高めれば内発的動機づけが高まる」というコトバとコトバの関係式を用いて現象を表している。このように現象を構造化することがソフトサイエンスやハードサイエンスといった垣根を越えた共通の科学的営みの第1の要件となる。

この第1要件は川喜田（1986）の真の科学的な方法の3点目に当てはめることができる。3点目では単に結論を明確に示すことだけを提示しており、これは論文や発表での表記上の問題にしかすぎない。しかし構造構成主義を科学論として設定すると、叙述化の際に結論を明示することは現象をコトバとコトバの関係式で表すという現象の構造化に言えかえられる。つまり真の科学的な方法の3点目は構造構成主義によって原理的に基礎付けるこ

とで、科学的営みの第1の要件となりえよう。

しかし現象の構造化は非常に緩い基準である。現象の構造化はともすれば我々人間が日常的に行っている行為でさえもある。よって現象の構造化だけでは到底科学性を担保したとは言えず、なんでもアリの相対主義に陥ってしまう。そこで構造構成主義では第2点目の要件を提示している。

3.4 構造化に至る軌跡の開示

実験研究に代表される量的研究では厳密な条件統制を行うことで再現性を確保することで科学性を担保しようとする。確かにハードサイエンスの分野では厳密な条件統制はある程度まで可能かもしれない。しかし英語教育学研究ではどうだろうか。学習者に影響を与える諸要因は膨大であり、それらを完全に同一に再現することは原理的に不可能である。英語教育学研究では現場を重視し、生身の学習者や日々の授業が研究対象となることがある。既存のクラスルームでの実験研究を考えれば、いかに条件統制が原理的に不可能であるかが分かる。さらに質的研究では個々の学習者や学習に関わる一回起生の現象を扱うのだから、条件統制はさらに困難である。自然科学における再現性を科学性の要件としてしまうと、英語教育学や特に質的研究などの現場研究は排除されてしまうと言えよう。

そこで構造構成主義では「条件統制」を科学の要件とはせず、「条件開示」を科学の要件とする。

構造構成主義においては「条件統制」ではなく、「条件開示」を基礎に据えることになる。条件開示さえされていれば、現場で提起された構造も、特定の条件下で得られた構造であることを踏まえた上で、読み手がその構造の有効性やその射程を判断することが可能となる。

数量的研究であっても、質的研究であってもそれは同じであり、提起された構造は、どのような関心や目的をもつ研究者が、何を対象とし、どのような観点からどのようにデータを収集し、どのような角度からどのようにして分析をして、それにどのような観点から解釈を加えた結果得られたものなのか諸条件を開示していくのである。(西條 2005a, pp.155-156)

現象を構造化するにあたって、研究者は自分自身の研究目的に沿って色々な判断を行う。調査協力者の選出から、データの収集方法、分析方法、分析や解釈の視点など、広範囲に及ぶ。このように構造化に向けた条件開示は、ハードサイエンスのみならず、英語教育学などのソフトサイエンスにおいても可能である。条件を開示しておけば、実験の再現も可能であり、また反証も可能になる。構造構成主義では条件開示を「構造化に至る軌跡の開示」と呼び、第2の科学性の要件としている。

川喜田(1986)の真の科学的な方法の第1点目と第2点目でデータ収集方法の開示とデータの加工処理方法のガラス張りを挙げている。これらはKJ法の研究プロセスにおける諸条件を開示することであり、構造構成主義の構造化に至る軌跡の開示と合致する。ただし川喜田(1986)の提示はあくまでデータに関連する事柄だけの開示である。しかし構造構成主義をKJ法の科学論として設定すると、データ関連の事柄だけではなく、現象の構

造化に至る諸条件の開示も行わなければならない。つまりデータ収集段階（データ収集や加工）、分析段階（ラベル作り、グループ編成、図解化、叙述化）、結果の提示段階という、現象の構造化に向けたすべてのプロセスに関わる諸要因をできる限り開示する必要がある。では KJ 法の研究プロセスに沿ってどの情報を開示する必要があるのかを述べてみる（表 2 参照）。

表 2. KJ 法の研究プロセスと結果を評価するための評価基準

データ 収集段階	①データ収集方法やフィールドでの研究者の関わり度 合いを明示しているか ②データの加工方法を示しているか ③データの質と量は研究目的に対して適切か ④対象となる調査協力者について詳細に記述されて いるか	構造化に至る軌跡を 開示
分析段階	①グループ編成はデータをして語らしめているか ②表札づくりのプロセスが可能な限り透明化されて いるか ③図解は他者と納得が共有できるものか	
結果の 提示段階	①叙述化は図解に沿って目的相関的に構成されて いるか ②結論と共にデータと図解が提示されているか ----- ③結論を明示し、現象を構造化しているか	現象の構造化

データ収集段階で開示すべきは、データ収集方法やフィールドでの研究者の関わり度合い、データの加工方法、データの質と量は研究目的に対して適切か、という点である。KJ 法で分析可能な質的データは自由記述形式の質問紙、観察によるフィールドノート、インタビューなど多様である。どのようなデータ収集方法を採用したかを、その理由と合わせて明示しておく必要がある。またフィールドでの研究者と調査協力者の関係はデータに大きな影響を与える。単なる観察者として調査協力者とは関係を持たずに観察を行うのか、それとも教室で研究者が教室として調査協力者に接するのかではデータの質が異なる。またデータをどのように加工し、どの程度のデータを収集するのも、研究目的と相対的に決定されるものであり、絶対的に決まったルールは無い。これらの情報を開示しておくことで、他の研究者がその研究を再現できる。

次に分析段階では、データをして語らしめることでグループ編成を行っているかどうか
が重要である。前節でも述べたように、既存のカテゴリーに当てはめてしまうのは KJ 法
とは似て非なるものである。また表札づくりのプロセスが可能な限り透明化することも重
要である。表札はデータの志を聴き取ることで作成されるため、研究者のセンスが試され
る。すべての表札づくりのプロセスを明らかにすることは、論文の紙面の制約上不可能な
場合が多いだろう。しかし 1997 年版では表札づくりの方法として核融合法や混ぜ合わせ方
式が提示されたので、最低限どの方法を用いたかを明示しておく必要がある。次に図解

は他者と納得が共有できるものかどうかとも重要である。データを拡大解釈したりすると独りよがりの図解が出来上がってしまう。実際の分析の際は、図解が完成した後に、他の研究者に図解を見てもらい、データと図解に極端な乖離がなく独善的になっていないかチェックをしてもらうのも有効であろう。

結果の提示段階では、叙述化が図解に沿って目的相関的に構成されているかが重要である。図解からかけ離れた叙述化を行ってしまえば、結局データを歪んだ形で解釈したことになる。図解に忠実に叙述化をしなければならない。ただし、図解すべてを叙述すると冗長になってしまう場合もある。研究目的に照らし合わせた判断が必要である。結論を提示する際はデータと図解が提示されている必要がある。データは図解の中に含めてしまっても構わないし、アペンディックスで巻末に提示してもよいだろう。データから図解が生まれ、叙述化が行われるので、データがなければ図解の妥当性を判断できない。図解が提示されていなければ叙述化の妥当性も判断できない。その結果、結論の妥当性も判断できなくなってしまう。

以上の質的研究法としての KJ 法の研究プロセスと結果を評価するための評価基準を表にまとめておく（表 2 参照）。

4. まとめ

以上、本論は KJ 法を実践するための 4 つの NOT とそれに関連する KJ 法の研究プロセスと結果を評価するための評価基準を提示した。実際の KJ 法には色々な流派があり、研究者が創意工夫しながら改良されてきているが、本論では川喜田二郎の方法を忠実に概説した。今後の KJ 法を行ううえでの一助になれば幸いである。

注

1. 川喜田二郎がインタビューで述べていることによると、KJ 法の着想に至ったのは 1951 年である（川喜田，松沢，やまだ，2003）。
2. 本論は KJ 法入門であるので、KJ 法の創始者である川喜田二郎の主張に沿ってすべてを論じていく。実際に著者が KJ 法を運用する際には、若干の修正や改良を加えているが、ここでは川喜田二郎の KJ 法の入門ということで、これらの点については言及しない。
3. KJ 法に限らず他の質的研究においてもデータのグループ分け作業を複数の研究者で行い、評定者間の一致を求める場合がある。しかしこのアプローチは量的研究の評価基準で質的研究を評価しようとするものであり、多くの問題点がある。この点についての詳細は Cutcliff & Mckenna (1999) を参照。
4. 構造構成主義では現象の構造化と構造化に至る軌跡の開示によって広義の科学性が獲得できるとしている。広義の科学性とは、予測可能性、制御可能性、再現可能性、反証可能性、転用可能性、一般化可能性（アナロジーによる一般化）を指す。詳細は西條（2005）や西條（2008）を参照。
5. 構造構成主義と KJ 法の関連は西條（2008, p. 178）で大まかに述べられているが、本論ではそれを英語教育学の文脈に当てはめながら、より詳細に議論を行う。

参考文献

- Cutcliffe, J. R. & McKenna, H. P. (1999). Establishing the credibility of qualitative research findings: The plot thickens. *Journal of Advanced Nursing*, 30, 374–80.
- 舟島なをみ (2007). 『質的研究への挑戦』 医学書院.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. New York: Aldine Publishing.
- Guba, E. G., & Lincoln Y. S. (1989). *Fourth generation evaluation*. CA: Sage, Newbury Park.
- Hammersley, M. (1992). What's Wrong with Ethnography? Methodological explorations. London: Routledge.
- 池田清彦 (1998). 『構造主義科学論の冒険』 講談社.
- 川喜田二郎 (1967). 『発想法－創造性開発のために』 中央公論社.
- 川喜田二郎 (1970). 『続・発想法－KJ法の展開と応用』 中央公論社.
- 川喜田二郎 (1986). 『KJ法－混沌をして語らしめる』 中央公論社.
- 川喜田二郎 (1997). 『KJ法入門コーステキスト4.0』 KJ法本部・川喜田研究所.
- 川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ (2003). 「KJ法の原点と核心を語る－川喜田二郎さんインタビュー」 『質的心理学研究』, 2, 6–28.
- Lincoln, Y. S., & Guba, E. G. (1985). *Naturalistic enquiry*. CA: Sage, Newbury Park.
- 箕浦康子 (2009). 『フィールドワークの技法と実際Ⅱ－分析・解釈編』 ミネルヴァ書房.
- 西條剛央 (2005). 『構造構成主義とは何か－次世代人間科学の原理』 北大路書房.
- 西條剛央 (2008). 『ライブ講義・質的研究とは何か－研究発表から論文執筆, 評価, 新次元の研究法まで (SCQRM アドバンス編)』 北大路書房.